
日本における映画英語教育の流れ

－ 1990年代前半の流れ－

広島国際大学 角山 照彦

1. はじめに

日本の英語教育における1980年代以前の映画活用の流れをまとめた角山(2004)に続き、角山(2005)では1980年代の流れに焦点を当てて検討を行い、その結果、1980年代を「授業実践の時代」と位置づけた。1980年代には、映画は映像つきのauthenticなリスニング教材として活用されるようになってきたが、その背景には、ハード・ソフト両面の整備が進んできたことに加え、authenticな英語に対する英語教員の関心が高まってきたことも大きく影響していた。こうした映画の活用は、学習者の動機付けには大きな効果があったものの、聴解力向上における効果は十分確認されておらず、映画の英語は、authenticではあるが、「学生には難し過ぎる」と捉えられることも多かった。そうした状況で注目され始めたのがClosed Caption(以下、CCとする)という英語字幕の活用であり、CCを活用した様々な実践が始まったのも1980年代の大きな動きであった。

本稿では、引き続き1990年代前半における映画活用の流れに焦点を当て、メディアに関する動きと研究動向についてまとめてゆく。

日本における映画英語教育の流れ－1990年代前半の流れ－

2. メディアに関する動き

1990年代に入ると、マルチメディアという言葉が一般的になってきた。教育機器の発達が目覚しく、また映画のビデオやレーザーディスクのソフトも非常に増えてきた。CCデコーダーでは、パソコンにCC信号をデータとして取り入れる機能を備えたもの（例えば、Sanyo SLD-800やLimex LCD-3000など）が発売され、字幕データをテキストファイルとして編集、加工することも可能となった。

しかしながら、当初国内で発売されるビデオソフトにはCC信号は入っておらず、輸入版のビデオを使用するしかなかった。しかし、1992年よりワーナー・ホーム・ビデオから発売される新作ビデオの一部には、CC信号が挿入されることとなった（吉田、1995：173）。その数は1994年4月の時点で30タイトルと決して多くはなかったが、後にはほとんどの新作ビデオがCC信号入りで発売されるようになった。¹

また、1995年には、CC信号入りビデオに学習ガイドなどをつけて個人の英語学習用にしたCINEPALシリーズが発売されている。取り上げられた作品としては、『ボディーガード』(*The Bodyguard*) などがある。

このCC信号はレーザーディスクにも取り入れられ、CC信号入りのレーザーディスクも発売されたが、レーザーディスクの場合は、さらに、シナリオディスクと呼ばれる独自の英語字幕が取り入れられた。これは、レーザーディスク・グラフィック (LD-G) という規格であるが、CCの欠点とされた次の2点を解消したものである。

- ① 早口の部分では台詞が略されることがあり、実際の発話に対して100%正確とは言えない。
- ② 全て大文字表記のため日本人英語学習者には読みづらい。

このシナリオディスクは、1992年に発売されたが、1994年4月の時点で170タイトル発売されており（小西、1995：169）、英語字幕で視聴可能なメディアとしては、当時はビデオよりもレーザーディスクの方がソフトの数の上では勝っていた。また、1994年には、「Laserdisc 英会話シリーズ映

画編」というシリーズで、『赤毛のアン』(*Anne of Green Gables*)や『ボディガード』などを活用した映画ソフトが発売されている。

他にも、映画の対訳シナリオが数多く出版され、手軽に映画のシナリオが入手できるようになってきた。シナリオの出版は、70年代半ばからは下火となり、英語学習雑誌や英字新聞に掲載されるシナリオの抜粋以外はあまり入手出来なくなっていたが、90年代に入り、再び脚光を浴びるようになって来た。

中でも、スクリーンプレイ出版²は、1988年に、『E.T.』(*E. T. The Extra-Terrestrial*)のビデオ発売時期に同映画のシナリオを発売して以来、90年代には数多くのシナリオを発売しており、1994年3月には51タイトルが出版されるに至っている。他にも、タトル出版から「Screen English シリーズ」として、『愛と青春の旅立ち』(*An Officer and a Gentleman*)、『愛と追憶の日々』(*Terms of Endearment*)などが発売された。今回のシナリオ出版が以前と違うのは、いわゆる名画だけでなく、新作映画のシナリオも発売されるようになってきたことである。

3. 研究動向

このように、映画を活用した英語学習教材が活況を呈する中、その動きと連動するように、映画の活用に関する実践報告や研究の数も急増してきた。

1990年代当初の状況について、宮本(1991)は、「映画を教材に取り入れることに関心を寄せる教師は多いが、その効果に関する実証研究は依然として少なく、教材を選択する指針もまだ確立されていない」と述べている。また、宮本は、映画利用の最大の問題点として、「生の英語の聞き取りの難しさ」を挙げている。動機付けの点に関しては、多くの教員が映画活用の効果として挙げているものの、映画の使用が学習者の聴解力向上につながるのかという点が、80年代後半の実践報告の結果として、大きな問題点とされたようだ。当時の実践報告や研究を見ると、90年代当初の映画英語教育の研究においては、「動機付け」と「聴解力向上」の

日本における映画英語教育の流れ－1990年代前半の流れ－

二つがキーワードとなっているように思われる。

まず、動機付けに関しては、すでに木村(1988)をはじめ、80年代の実践報告でもその効果が指摘されていたが、90年代からはいわゆる語学教育用ビデオと映画ビデオを比較する形で研究されていった。森・磯部・坂本・宮本(1990)は、教育用ビデオと映画ビデオに対する学習者の反応をアンケート結果で報告しているが、語学教育用ビデオに比べ、映画ビデオ『ローマの休日』(*Roman Holiday*)に対する支持が圧倒的であった。また、教育用ビデオに関しては、視聴者の興味を惹きつけるように作られたミステリー仕立てのビデオ“Switch on”(NCI刊)であっても、学習を進めてゆく中で学生の側に「飽き」が見受けられたと述べている。同調査では、語学教育用ビデオに比べて映画ビデオの方が学生の動機付けには著しい効果があることが報告されているが、同時に、映画を授業で使用する場合、教材作成にかかる教師の負担が非常に大きいことを問題点として挙げている。

また、大久保・渡部(1991)は、二ヵ月半の間学生に対して自習課題として映画ビデオの聞き取りを課して、学生の反応を調べているが、同調査でも映画は学生の動機付けに大きな効果があったと報告している。映画の動機付けに関する高い効果は、80年代の実践報告や研究から一貫してほぼ全面的に支持されていることが分かる。

しかし、聴解力向上における効果に関しては、動機付けに関する効果の場合と違って、なかなか結論は容易に導き出せなかった。前述の大久保・渡部では、学生の聴解力向上にも効果があったとしているが、Takeuchi, Edasawa & Nishizaki(1990)など、動機付けには大きな効果があったものの、聴解力の向上に対しては疑問を呈するものも見られた。

特に、映画使用と聴解力向上との関係に関する研究は、CC関連の研究と密接に結びつくことになる。これは、CCが80年代後半の導入当初、聞き取りが難しいという映画の英語の短所をうまく補って、理解しやすい教材へ転換させるための大きな武器と考えられたことによるものであろう。

まず、宮本(1991)は、CC付き映画である『刑事ジョン・ブック／目撃

者』(Eyewitness)が聴解力および読解力養成に及ぼす効果について調査したもののだが、読解力養成に関しては効果があると認められたものの、聴解力養成における効果は疑問視している。そして、聴解力養成を目指す場合には、CCはむしろ「音」への注意力を妨げる可能性をはらんでいると指摘している。土屋(1994)も、「CCは内容理解に大きな効果があるとは言えない」としている。逆に、小張・久保田・ランダー(1993)は、英語字幕の付加が聴解力養成に効果があったことを報告している。また、鈴木(1994)も『サウンド・オブ・ミュージック』(The Sound of Music)を使用した実験でCCが内容理解に役立ったとしている。

異なる英語レベルの学習者に対する実験では、Hirose & Kamei (1993)は、学習者の英語レベルに関係なく、CCは効果があると結論付けているのに対し、亀井(1994)は、CCは上級学習者よりもむしろ初級学力者の方に効果があると報告している。また、亀井・広瀬(1994)は、学習者はその英語レベルによって情報チャンネルを使い分けていると指摘している。

このように、映画の活用は学習者の聴解力養成に寄与するかという問題は、CCという英語字幕の問題と結びつき、映像、音声、文字というメディアの多重化が学習者の情報処理および内容理解にどのような影響を及ぼすのかという問題へ焦点が移行してしまった感がある。

これらの実験結果は肯定的なものとするものと否定的なものとするものと様々であるが、これは学習者のレベル、使用された映画の英語のレベル、実験方法など、様々な要因が関連しているため、一概に比較は出来ない。この問題に関しては、まだ十分な結論が出たとは言えない状況である。

しかしながら、土屋(1994)も強調するように、これらの研究結果から、映画使用における教材選択や提示方法のさらなる研究の必要性が強く主張されるようになる。

上記の研究や授業実践は、ほとんどが大学・短期大学におけるものであったが、高等学校での実践報告も活発になってきた。雑誌『新英語教育』では、1988年10月号における特集に続き、1994年2月号でも「映画活用術」としてさまざまな実践報告を紹介している。助動詞の導入に『ローマの休日』を活用した間中(1994)など、かならずしもCCにはこだわら

日本における映画英語教育の流れ－1990年代前半の流れ－

ず、文法項目の指導や動機付けの面などから様々な取り組みがなされている。『新英語教育』では、授業で使える映画という観点から「シネマin class」という映画の紹介記事の連載も1992年から始まっている。また、内村(1995)など、ごく少数ではあるが、中学校における授業実践も報告されるようになってきた。

そうした中、1995年には、映画英語教育学会(ATEM)が設立されるに至っている。くしくも映画生誕100年の年にこうした学会が設立されたのは、非常に興味深いことである。これまで一般の英語学習者にはその効果が長く認められていた映画がようやく英語教育の分野でも認知されるようになったと言える。

ATEMは、紀要『映画英語教育研究』の発行をはじめ、これまで映画英語教育の普及に大きな役割を果たしてきたと言える。一例を挙げると、学会が発行した『映画ビデオ等を教育に使用する時の著作権ハンドブック』は、映画を授業で使用する際の著作権問題に対して指針を示したものである。授業で映画を学生に視聴させることや教材用としてビデオテープに映画を編集することなどが著作権の侵害になるのかなど、著作権の問題は、長年多くの教師を悩ませてきただけに、それに対して指針を示したことの意義は大きいと言える。また、製作から50年以上経過して著作権がなくなり、いわゆるPublic Domain (PD)³となった映画シナリオのデータベース化を進めるなど、映画の教材化への環境作りにも着手している。

学会の設立にあわせたように、1995年には様々な研究が報告されている。

まず、Amanuma(1995)は、「映画を使った授業計画」として、教材としての映画を選択する際の基準を次の9つにまとめ、授業目的に合致する映画選択について論じている。

- ① リーディング教材を補うものとして使えるか
- ② 内容が豊富であるか
- ③ 異文化理解を教えるのに適切であるか
- ④ 言語理解の上で役立つparalinguisticなヒントは豊富か
- ⑤ 特定の文法項目を教えるのに適切であるか

- ⑥ listening comprehension and/or listening perception の教材として使えるか
- ⑦ 学習者の動機付けになり、学習効果が上がるか
- ⑧ speaking, listening, reading, writing の4技能を統合した教材となるか
- ⑨ 英語の多様性を示す教材となるか

そうした基準に基づき、映画を取り入れた授業計画として次の3つを提示している。

- ① テーマ別シラバス (Theme-based syllabus) …異文化理解などを主眼としたもの
- ② マイクロ・スキル・シラバス (Micro-skill syllabus) …リスニング演習や特定の文法項目などの指導を念頭においたもの
- ③ 4技能統合シラバス (Integrated-skill syllabus) …映画をまさしく総合教材として活用しようとするもの

これまでも教材となる映画の選択基準の重要性を指摘する研究はあったが、詳細なシラバス案まで提示したものは恐らくこれが初めてであろう。「映画がauthenticな教材を提供してくれる材料だからこそ、選択基準が重要になってくると思われる」という天沼(1996)の主張には非常に説得力がある。これまでの実践報告には、教材となった映画の選択基準に関してあいまいなものが少なくなっただけに、こうした選択基準の提示は非常に重要な指針となった。また、この他にも、学生のニーズ分析の観点から授業で使用する映画選択に対して指針を提示した塚越(1995)や、実際の授業における詳細なリスニング指導手順を示した高橋(1995a, b)など、様々な実践報告がなされた。

90年代も半ばになり、これまでの映画が英語の授業に使えるのではないかという段階から、どのように使ったらよいのかという段階へ、研究の焦点がシフトしてきたことが分かる。多くの実践報告をまとめた『映画英語教育のすすめ』(スクリーンプレイ出版)も出版されるなど、まさに、1995年は映画英語教育が本格的にスタートした年とも言えるだろう。

日本における映画英語教育の流れ－1990年代前半の流れ－

4. おわりに

本稿では、映画英語教育における1990年代前半の流れを概観してきたが、実践報告が主であった80年代に比べ、映画は本格的な研究対象となってきたと言えるだろう。また、その内容においても、授業における映画使用の可能性を探るといった段階から、教材選択の指針、シラバスモデルの作成・提示など、いかに効果的に映画を活用するかという段階へ研究の視点がシフトしてきたことが分かる。動機付けと聴解力向上が多くの研究でキーワードとされたが、動機付けにおける効果がほぼ全面的に支持されてきたのに対し、聴解力向上に関する効果についてはまだ十分に明らかにはなっていない。

90年代後半には教育のマルチメディア化が急速に進み、この流れに呼応するかのように映画の活用に関しても様々な観点から研究が進むことになるが、90年代後半以降の流れについては、また次の機会に報告をしたい。

■ 注

1. 現在CC信号の入っているビデオの一覧は次のサイトで確認することが出来る。
<http://www.i-fm.com/closed-caption/index.html>
2. 2001年12月に社名を変更し、現在の社名は「スクリーンプレイ」である。
3. 映画公表後50年以上（または著作者の死後50年）経過し、著作権保護が消滅したものを指す。「公有財産」と訳されることが多い。

日本における映画英語教育の流れ－1990年代前半の流れ－

■ 参考文献

- Amanuma, E. (1995) "Incorporating Movie Video in an English Teaching Syllabus." *The Bulletin of the Nippon Veterinary and Animal Science University* (44), 80-89
- Hirose, K. & Kamei, S. (1993) "Effects of English Captions in Relation to Learner Proficiency Level and Type of Information." *Language Laboratory* (30)
- Takeuchi, O., Edasawa, Y. & Nishizaki, K. (1990) "Do Films Improve EFL Students' Listening Comprehension Ability?" *Language Laboratory* (27), 81-98
- 天沼えり子 (1996) 「映画を使った英語の授業計画」『映画英語教育研究』第2号, 70-73
- 内村修 (1995) 「中学英語教育に映画をどう取り入れるか？」スクリーンプレイ出版編集部 (編) 『映画英語教育のすすめ』スクリーンプレイ出版, 185-187
- 著作権問題専門委員会 (編) (1998) 『映画ビデオ等を教育に使用する時の著作権ハンドブック』映画英語教育学会
- 大久保澄子・渡部祥子 (1991) 「映画ビデオ教材が聴解力向上に及ぼす効果」『研究論集』第4号, 日本橋女学館短期大学英語科, 1-20
- 小張敬之・久保田章・ジョン・ランダー (1993) 「英語字幕付きビデオ教材の聴取理解に及ぼす効果の研究」『外国語教育論集』第15号, 筑波大学外国語センター, 45-67
- 角山照彦 (2004) 「日本における映画英語教育の流れ①－1980年代以前の流れ－」『映画英語教育研究』第9号, 17-32
- 角山照彦 (2005) 「日本における映画英語教育の流れ②－1980年代の流れ－」『映画英語教育研究』第10号, 3-16
- 亀井節子 (1994) 「Function理解における映像の役割」『関東甲信越英語教育学会研究紀要』第8号, 65-74
- 亀井節子・広瀬恵子 (1994) 「外国語理解におけるメディア多重化の効果：学習者の英語力との関係で」 *Language Laboratory* (31), 1-17
- 木村博是 (1988) 「英語字幕 "Top Gun" を使った授業」『視聴覚教室通信』第10号, 近畿大学教養学部視聴覚教室, 24-34
- 小西敏之 (1995) 「映画英語教育とレーザーディスク」スクリーンプレイ出版編集部 (編) 『映画英語教育のすすめ』スクリーンプレイ出版, 167-170
- スクリーンプレイ出版編集部 (編) (1995) 『映画英語教育のすすめ』スクリーンプレイ出版
- 鈴木典子 (1994) 「キャプション付き映画の教育的効果について」『東洋女子短期大学研究紀要』第26号, 71-84
- 高橋宏 (1995a) 「映画を利用したリスニングの指導」『映画英語教育研究』第1号, 30-42
- 高橋宏 (1995b) 「映画を使ったリスニング授業の実際」スクリーンプレイ出版編集部 (編) 『映画英語教育のすすめ』スクリーンプレイ出版, 60-70

- 塚越博史 (1995)「映画英語教育とニーズ分析」『映画英語教育研究』 第1号, 43-59
- 土屋武久 (1994)「マルチメディア教材と内容理解:英語字幕付きビデオの効果的な利用のために」『英語教育』 第42巻第14号, 42-44
- 間中和歌江 (1994)「『ローマの休日』で助動詞を学ぶ」『新英語教育』 第293号, 23
- 宮本節子 (1991)「英語字幕の利用効果を探る: A Preliminary Report」『名古屋学院大学外国語教育紀要』 第22号, 21-32
- 森豪・磯部哲也・坂本季詩雄・宮本節子 (1990)「LL授業教材の利用開発研究Ⅱ -教育用ビデオ教材とキャプション付き映画教材による授業研究-」『愛知工業大学研究報告』 第25号, 23-32
- 吉田豊 (1995)「映画英語教育とビデオ会社」 スクリーンプレイ出版編集部 (編)『映画英語教育のすすめ』 スクリーンプレイ出版, 173-174

日本における映画英語教育の流れ－1990年代前半の流れ－

■ Abstract

The History of Teaching English through Films: Focusing on the Early 1990s

Teruhiko Kadoyama

This paper represents the third part of an attempt to review the history of teaching English through films in Japan. The main objective of this historical study is to reveal how commercial films have been utilized in the teaching of English in Japan. It also aims to reveal the present state and possible challenges faced by teachers using films in the classroom.

This paper focuses on the first half of the 1990s, when the use of films began to be examined from various standpoints, including motivation, listening and syllabus design. The motivational effect of films was reported in a number of studies while the results on learners' listening comprehension were still varied. Also, the establishment of the Association of Teaching English through Movies (ATEM) in 1995 helped lead researchers to further examine the use of films in the classroom.

This paper concludes that following the 1980s, in which the focus of studies was on classroom use, the early 1990s marked the start of actual research on teaching through films in Japan.